

今月のトピックス 「クワコナカイガラムシについて」

1) 生活史と特徴

クワコナカイガラムシは多くの果樹や樹木に寄生します。三重県では主にナシの害虫です。白い粉をまぶしたような小判型の柔らかい体をしていて、雌成虫は 4mm 前後になります。カイガラムシにしては珍しく成虫になっても歩き回ることができ、幼虫は葉裏の主脈付近に、成虫は剪定による切り口や果梗部などのすき間に集まります(図 1)。群生すると白い綿が付いたように見えます。

三重県では年 3 回発生していると思われます。秋に樹皮下などに産みつけられた卵塊で越冬します。



図1 葉裏の主脈付近に寄生するクワコナカイガラムシ幼虫
(左図2齢幼虫、右図脱皮直後3齢幼虫)

2) 被害の様子

群生しているところでは、すすが発生して黒くなります。暗くて狭いところが好きなので、袋かけをすると果実袋内に幼虫が入り込み、果梗部や果頂部のくぼみに寄生します(図 2)。収穫してみて、すすや果皮表面の直径数 mm の緑色斑が残る着色不良(図 3)といった被害に気がつき、びっくりすることになります。近年、三重県内のナシ園では、年によって局所的に多発し

ています。



図2 果梗部に産みつけられた卵塊



図3 収穫期の果皮着色不良(緑色斑)

3) 防除の考え方

5 月上中旬(第 1 世代)と 7 月上中旬(第 2 世代)の幼虫発生期には、幼虫の齢期が比較的そろっているので、防除の適期です。バンド誘殺や粗皮けずりも有効です。

4) 天敵の活用は?

一般的にカイガラムシ類の多発は天敵相の貧弱化によるところが大きいと思われる。防除薬剤の変遷や各種資材の変化などが、土着天敵相の変化に影響しているかもしれません。

県内でも天敵(寄生ハチ類)の寄生が確認されます。園地内の土着天敵類保護のために、多発傾向にある園地では、収穫期前後の殺虫剤の体系を見直す必要があるそうです。周辺の環境を保全すると、土着天敵類の待避増殖場所になることがわかっています。